

生命科学部

I 2018年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2018年度大学評価結果総評】(参考)

生命科学部にとって2017年度は、現在の3学科体制になって初めての卒業生を輩出したが、今後は大学院組織とも連携しながら、教育・研究体制の点検と改善が必要になってくるであろう。質保証、教育課程・学習成果、学生の受け入れ、学生支援に関する各項目については、総じて良好な運営がなされている。教員・教員組織については、求める教員像および教員組織の編制方針が極めて明瞭に示されている点が目を引き、評価できる。社会連携・社会貢献については、外部組織との共同研究や展示会への出展など、大変活発な活動がなされており、この点も評価できる。ただしこれらの活動は、社会連携・社会貢献の評価所見および2018年度の重点目標にも記載があるとおり、教員個人あるいは研究室単位での取り組みが多かったように見受けられる。属人的、局所的でなく、学部組織として継続発展が可能な体制になるよう、ノウハウの共有や伝承を行う取り組みに期待したい。

【2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

生命科学部は、2014年度より3学科体制となり、2017年度に大学院に進学した学生が2019年度に修士課程を修了することになる。そのため、2019年度は大学院組織と連携した教育・研究体制が有効であったかを点検できる年となる。そこで、2019年度末は、大学院組織の情報を入手して、学部の教育・研究体制の有効性を点検し、次年度以降の学部の教育・研究体制の改善に向けた引継ぎを行う。また、「総じて良好な運営がなされている」と評価された質保証、教育課程・学習成果、学生の受け入れ、学生支援に関しては本年度も継続するが、特に学生の受け入れに関する項目を重点的かつ効率的に行う。さらに、社会連携・社会貢献に関しては、現状の「大変活発な活動」の継続発展が可能となるよう、ノウハウの共有や伝承を行える枠組みを学部組織として構築する。

【2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

生命科学部は2014年度に現在の3学科体制となり、大学院との連携による教育・研究両面での更なる発展を目指してその有効性の検討に入ることは大いに期待したい。学部の運営に関しては総じて良好であり、学部の継続的發展が可能となるようなノウハウの共有と伝承を行える枠組みを構築して頂きたい。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

【2019年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。

S A B

※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。

学生が問題意識をもち、自ら学ぶ自立性を涵養するために、1年次からの実験・演習科目を導入している。学びの意欲を上げるために、各学科とも優秀卒論や資格の合格に対し、表彰を行っている。生命機能学科では、「生物化学」「分子生物学」「細胞生物学」「生物物理学」分野の講義を担当する専任教員が、講義内容を綿密に協議・検討して分担化し、体系的なカリキュラムを設定している。研究に対して高い意欲をもつ学生に対しては、2年次から「ゲノム」「蛋白質」「細胞」のいずれかの分野の研究室に所属し、講義と並行して研究を行うことも可能にしている。希望すれば4年次まで同じ研究室で研究を継続することができる。環境応用化学科では、公的資格試験(採用試験)合格者等を生命科学部奨励賞として毎年表彰しており、2018年度は14名を表彰した。「基礎応用化学実験」「応用化学実験 IAB、IIAB」「卒業研究」および演習科目を各学年に設置し、自ら学ぶ能力の育成に力を入れている。応用植物科学科では、樹木医補、自然再生士補、技術士補などの各種資格の取得に向けた科目を実施するとともに、公務員受験対策コースの設定やインターンシップを必須科目とするなど、社会が求める人材の育成に努めている。

【根拠資料】※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページURLや掲載冊子名称等

- ・生命科学部履修の手引き
- ・生命機能学科教室会議議事録

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

・生命科学部賞募集要項	
②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系的を確保していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修（個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ（必修・選択等）含む）への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。</p> <p>「カリキュラム・ポリシー」に基づき、各学科では3つの履修コースを設定し、カリキュラムマップで順次性を含め体系的な教育課程を明示している。</p> <p>生命機能学科：ゲノム機能コース、蛋白質機能コース、細胞機能コース 環境応用化学科：物質創製化学コース、グリーンケミストリコース、環境化学工学コース 応用植物科学科：植物クリニカルコース、グリーンテクノロジーコース、グリーンマネジメントコース</p> <p>1、2年次において各コースに進むための基盤となる重要な講義科目・実習科目は必修化し、3、4年次における発展的な専門科目は学生の興味に応じ選択化するなどの配慮を行っている。専門教育の接続科目として、物理学基礎、化学基礎、生物学基礎、微分積分学及び演習・線形代数学及び演習、科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲなどの理系教養科目が適切に配置されている。科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲは選択科目であるものの専門科目への導入の役目を果たす重要な教養科目であるが、環境応用化学科では履修率が過去5年間平均99%と、ほぼ必修に近い扱いとしており、生命機能学科においても2年生から研究室配属を希望する学生には修得を義務づけることにより、8割以上が履修するシステムを作った。応用植物科学科では、植物病の診断・治療・予防の先端技術習得に必要な基礎生命科学に関連する科目は全学生の履修を推奨している。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学部ホームページ http://www.hosei.ac.jp/seimei/ ・生命機能学科ホームページ http://fb.ws.hosei.ac.jp/wp/ ・環境応用化学科ホームページ http://chem.ws.hosei.ac.jp/wp/ ・応用植物科学科 http://depcps.ws.hosei.ac.jp/wp/ ・生命科学部履修の手引き 	
③幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> S A B
<p>※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。</p> <p>2012年度に小金井リベラルアーツセンターが設置されて以降、生命科学部と理工学部の教養教育科目の実施に際して調整等を行っている。各学科とも初年次科目を指定し、幅広い教養が身につくよう配慮している。また、卒業研究を通して自立性やプレゼンテーション能力を涵養できるようにしている。特に、2018年度に純増で生命科学部所属の物理担当の教養の専任教員が着任し、化学担当の教養教員は、2018年度以前に任期付きであったものが2019年4月から専任となった。また、2018年度には、教養教育と専門教育の連携を強めるために教養・専門教育連携委員会を発足した。このことにより、生命科学部にふさわしい教養教育をコーディネートする体制が整いつつあり、教養科目の授業担当者と対象学科との緊密な連絡も行われている。生命機能学科では、早い時期から研究室に所属できるというカリキュラム上の特色を生かし、研究を通して総合的な判断力を育成している。同時に、研究室におけるコミュニケーションを通して社会性を身につける機会を与えている。環境応用化学科では、1年次春学期の必修科目「応用化学基礎」において、教員との対話、学生間のディスカッションの場を提供し、総合的な判断力や豊かな人間性を養うことに努めている。さらにチューター制度により上級生と交流する機会を設けることで、学習意欲の向上のみならず人間形成にも役立てている。応用植物科学科では、実験・実習科目（1、2、3年次必修）では、学生参加、問題解決、対話型の授業を、インターンシップ（2年次必修）では対話型、学生参加型（インターンシップ体験発表）の授業を実施しており、総合的な判断力や豊かな人間性の涵養に努めている。</p> <p>【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>2018年度に純増で生命科学部所属の物理担当の教養の専任教員が着任した。また、化学担当の教養教員は、2018年度以前は任期付きであったものが2019年4月以降に専任となった。さらに、2018年度には、教養教育と専門教育の連携を強めるために教養・専門教育連携委員会を発足した。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生命科学部教授会議事録 ・法政大学生命科学部設置の趣旨等を記載した書類 ・各学科教室会議（教員会議）議事録 	
④初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

初年次教育として、入学時にプレースメントテストおよびTOEIC-IPテストを実施し、クラス分けを行っている。推薦入試制度を通して入学した学生に対しては、入学前教育としてe-ラーニングの履修を課している。2017年度以降は学務と学科主任からそれぞれ独立に、e-ラーニング受講を徹底して呼び掛けている。さらに、付属校入学予定者向けガイダンスで、各学科主任より春休み期間に行う課題を課している。また、高校で「物理学基礎」「化学基礎」「生物学基礎」を履修しなかった学生を対象に、これらの科目に対応する理系教養科目を開講し、大学で必要な理科の知識の修得を図っている。さらに、付属校に特化した取り組みとして、適切な高大接続を行えるように、説明会や模擬授業等のイベントを行っている。生命機能学科では、1年次のガイダンス時に、必修実験演習科目のテキストとして「生命機能学実験の手引き」を配布している。このテキストには、実験の技術的な内容だけでなく、生命科学と英語の学習法、作文技術などについても掲載し、その内容についての講義も行っている。環境応用化学科では、1年次の必修科目「応用化学基礎」「応用化学入門」を通して導入教育を行っている。応用植物科学科では、初年次にレポートの作り方や資料の収集方法など、基本的な学習法を教育している。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・生命科学部履修の手引き
- ・各学科教室会議（教員会議）議事録
- ・生命機能学科生命機能学実験の手引き
- ・生命機能学科基礎実験 I/II・基礎演習 I/II シラバスと予定表
- ・環境応用化学科応用化学基礎、応用化学入門シラバス
- ・応用植物科学科アンケート

⑤学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。

S A B

※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

夏季および春季のSAプログラムを実施するとともに、定期的にTOEIC-IPテストを実施して、そのスコアを教室会議で評価・議論している。また、2014年度よりERP科目を卒業単位として認定（12単位を上限）した。ERPについてガイダンス等で周知を図り参加を強く推奨している。さらにSGU採択に伴い、2017年度より各学科の専任教員が参画するグローバルオープン科目（英語で自然科学を教授する）を設定し、開講している。また、英語による専門科目の設置についても検討している。特筆すべき実践として、生命機能学科では、1年次（秋学期）～2年次（春学期）には基礎科学英語を、3年次（秋学期）～4年次には科学英語を必修科目として少人数クラスで実施している。基礎英語についてはTOEIC-IPテストの成績に基づいたクラス分けをすることにより、学生の能力に応じたきめ細やかな教育を行っている。また、来日した海外の研究者によるセミナーを開催し、学部全体に公開している。環境応用化学科では、全教員が英語を取り入れた講義に取り組んでおり、教材・小テストを英語化するなど、国際性を養うための教育に取り組んでいる。また、新年度の学生向けガイダンスにおいて、SA参加者に体験談を語ってもらうことで、SAへの参加を推奨している。応用植物科学科では、SAやERPなどの英語教育を積極的に推奨している。その結果、2017年度は2名、2018年度も2名の派遣留学生を送り出し、2019年度は1名が留学を予定している。さらに、米国大学研究者によるセミナーや米国大学院に進学した卒業生による海外大学院体験セミナーを開催し国際感覚の醸成に努めている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・生命科学部履修の手引き
- ・生命科学部ERP、SAの実績、アンケート調査
- ・生命機能学科国内外研究者によるセミナー件数
- ・環境応用化学科ガイダンス資料
- ・応用植物科学科教員会議議事録

⑥学生の社会的および職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。

S A B

※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

学生に対して効果的な理系キャリア教育を実施するために、執行部、各学科就職担当教員がキャリアセンターと連携する体制を確立している。学部の理念に掲げる「統合的視野を持った実践的研究・技術者の育成」を実現するために、キャリアパスの第1段階として大学院進学を重視し、2016年度よりキャリアセンター主催で開催されている「理系進学ガイダンス」において、生命科学部は講演内容を吟味し、学部生へ参加を呼びかけるなど実施に協力している。生命機能学科では、3年生を対象に「進学説明会」と「就活説明会」を開催している。進路選択の判断材料を与えるため、研究者・技術者として活躍している大学院修了生に自身の体験を話してもらっている。環境応用化学科では、1年次の必修科目「応用化学

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

基礎」において、専門家によるキャリア教育を全3回実施し、社会的・職業的自立を志向した学ぶ意欲の育成を行っている。応用植物科学科では、キャリア教育の一環として、技術士試験対策、樹木医補、自然再生士補に向けた科目を初年次から受講するように指導している他、「植物医科ビジネス論」(2年生)、「植物医科学法論」、「知的財産総論」(3年生)などの実践的科目を配置している。また、農水省担当者による官庁公務説明会、卒業生による就活説明会やキャリア説明会等を随時行っている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・生命科学部履修の手引き
- ・各学科教室会議(教員会議)議事録
- ・生命機能学科生命機能学実験の手引き
- ・生命機能学科基礎実験 I/II・基礎演習 I/II シラバスと予定表
- ・環境応用化学科応用化学基礎シラバス
- ・応用植物科学科アンケート

1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。

S A B

【履修指導の体制および方法】 ※箇条書きで記入。

- ・各学科の入学時、学年別および留級生ガイダンス等において、理系教養科目の履修法など、幅広い科学の素養を身につけるためのポイントを丁寧に指導している。
- ・生命機能学科では、理系教養科目(化学、物理学、数学等)の積極的な履修を、教務担当教員が中心となって指導している。また、専門科目についてもカリキュラム・ポリシーに基づいた3つの履修コースの履修モデルを提示している。また2017年度からの試みとしてFB(生命機能学科)セミナーを2018年度においても開催し、研究講演と懇談会を実施して最先端の研究に触れることで学習意欲を活性化させることを目指した。
- ・環境応用化学科では、1年次春学期の「応用化学基礎」において、履修登録予定表を担当教員が確認し、履修に関するきめ細やかな指導をしている。特に、理系教養科目(化学、物理学、数学)の履修を強く推奨している。さらに、留級生を対象とするガイダンスを行い、親身な履修指導を実施している。
- ・応用植物科学科では、各学年に対して2名ずつの教員を「学年担当」として配置するとともに、チューター制度を活用することによってよりきめ細かい履修指導を実施している。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・各学科ガイダンス資料
- ・生命科学部履修の手引き
- ・FB(生命機能学科)セミナー案内
- ・環境応用科学科履修登録予定表
- ・環境応用化学科応用化学基礎シラバス
- ・応用植物科学科役割分担表

②学生の学習指導を適切に行っていますか。

S A B

※取り組み概要を記入。

生命科学部では、全専任教員がオフィスアワーを設定して学生の個別指導に当たるとともに、各学科に学生問題を担当する教員を置き、成績不振学生等の調査・対応を主導している。生命機能学科では、1~3年生の各学年の担任教員および基礎実験演習担当教員を設定し、基礎実験、演習科目等の実践的教育を行う際の、学生の学習上の問題に対応している。卒業研究については、学生の研究の進行度に合わせて成果発表を口頭またはポスターから選択できるようにし、論理的な説明法の習得と、多くのディスカッションを通じた論理的思考能力の育成を行っている。環境応用化学科では、教員は「応用化学基礎」の時間やオフィスアワーを用いて、きめ細かな学習指導を行っている。成績不振者については毎週実施される教室会議の中で情報を共有し、学科主任及び授業担当教員がケアするようにしている。教務助手並びに特任教育技術員は分担して主要講義・実験・演習科目に出席することで、その講義内容を把握し、学生からの質問等に対応できる体制を整えている。さらにTAがこれらをサポートする体制をとっている。応用植物科学科では、オフィスアワーを用いた個別指導のほか、成績不振者については教員会議で情報を共有するとともに、学生問題担当教員が優先的にケアしている。また、各学年の実験実習科目の指導は学年担当の特任教育技術員(1名)と教務助手(3名)が実験技術指導を担当するほか、全学年を通じて教育技術嘱託(1名)が植物栽培管理指導を行う体制をとっている。

【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

実験科目を中心として、成績不振学生等の個別対応を数多く行った。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
<ul style="list-style-type: none"> ・生命科学部履修の手引き ・生命機能学科各種委員リスト、ガイダンス資料、卒業論文発表会プログラム ・生命機能学科教室会議（教員会議）議事録 ・環境応用化学科基礎応用化学実験、応用化学実験 IAB、IIAB テキスト ・応用植物科学科教員会議議事録 	
③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※取り組み概要を記入。 生命機能学科では、1、2年次の基礎実験・演習・科学英語の科目において、統一テストを行い、各自の達成度を学生に認知させ、予習・復習の指標を提示している。環境応用化学科では、専門科目において毎回課題を課す、講義開始前に前回の講義の内容の小テストを随時行うなど予習、復習を行わせる工夫をしている。また、各科目で授業支援システムを活用し、授業に関連した資料を授業の前後で学生に配布するなど授業の予習・復習が行える様、十分に配慮している。応用植物科学科では、翌週の学生実習での実習内容を説明し、当日までに予習を行わせる工夫をしている。また、実験実習時間以外は学生実験室を解放し実習作業の復習時間に充てている。教員や学科内で保有する専門図書を開覧可能として、予習・復習に適した学習環境を整えている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
<ul style="list-style-type: none"> ・生命機能学科生命機能学実験の手引き ・生命機能学科基礎実験 I/II・基礎演習 I/II のアチーブメントテスト（統一テスト） ・生命機能学科基礎英語 I/II のアチーブメントテスト（統一テスト） ・環境応用化学科有機化学 I・II シラバス ・応用植物科学科基礎実験 I・II、植物医科学応用実験 I・II、植物医科学専門実験 I・II のシラバス 	
④教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
【具体的な科目名および授業形態・内容等】 ※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。 <ul style="list-style-type: none"> ・生命機能学科では、2年次から配属された学生には「生命機能学研究論文」の履修と口頭による卒業研究の成果発表を、3年次から配属された学生にはポスターによる成果発表を推奨している。これにより、卒業研究全体のレベルを落とすことなく、学生の意欲に応じた高い専門教育が行えるようになった。また、ポスター発表形式を導入した事により、他学科の教員を含めた多くの聴講者を集めることになり、広い学問的視野の育成に効果が期待できるようになった。 ・環境応用化学科では、講義科目と実験科目の関連性を検証している。予習や復習がいつでも行えるオンデマンド型の講義体制を取り入れることを目指して、授業支援システムを活用している。 実験科目については2017年度に「学生実験体制」に関する検討会を9回開催して決定した方針に従い、実験科目の教育体制を刷新した。春学期終了時及び秋学期終了時に検討会を開催し、2018年度より導入した「機器解説・演習」及び「発表スライド作成」の教育効果などについて議論し、次年度の改善に役立てるよう取り組んだ。 ・応用植物科学科では、1年生の学生実習において全員参加型の課題発表会、2年生では必修科目として全学生にインターンシップを実施、3年生では自ら研究計画を立て自主的に病害虫の診断を行う問題解決型の実習を実施するなど、学生参加型・対話型の教育を数多く取り入れている。また、学科内に開設している植物医科学センターの実践的な活動（植物病害虫診断事業）を4年次の卒業論文研究に生かすことで、問題解決能力に加えて、主体的思考能力や社会的適応性を育成する試みを行っている。 	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
<ul style="list-style-type: none"> ・生命科学部履修の手引き ・生命機能学科ガイダンス資料、卒業論文発表会プログラム ・生命機能学科基礎実験 I/II・基礎演習 I/II シラバスと予定表 ・環境応用科学科授業支援システム利用の試み ・環境応用化学科教室会議議事録 ・環境応用化学科学生実験体制についての検討会議事録 ・応用植物科学科各学年ガイダンス資料、卒業論文発表会講演要旨、植物生産基礎実習 I・II、植物医科学専門実験 I、植物医科学インターンシップのシラバス 	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

⑤それぞれの授業形態（講義、語学、演習・実験等）に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※どのような配慮が行われているかを記入。</p> <p>生命機能学科では、基礎科学英語において能力別に18人程度以下の少人数クラスを編成している。また、基礎実験では10人以下の班に分けて実験を行わせている。研究室への配属にあたっては、各研究室に最大でも10名以下になるよう配慮し、各学生に個別の研究テーマを与えて指導をしている。</p> <p>環境応用化学科では、1年次の「応用化学基礎」および3年次の「応用化学セミナー」において、教員によるきめ細かな指導を行うため、1教員当たり10名以下の学生数で授業を実施している。また、実験科目においては、学生が自律的に学ぶ教育内容および安全性を担保するため、1テーマ1回当たりの学生数を10名以下に絞っている。2018年度は新入生が12名定員超過であったが、予算措置により実験器具を追加購入し、これまで通り、1テーマ1回当たりの学生数を10名以下で実験を実施することができた。</p> <p>応用植物科学科では、1、2、3年生の実験・実習科目においては実験台当たりの学生数を最大7名以下に調整し、教育技術員、教務助手、TAによる指導が行き届くようにしている。また、研究室配属においては、各研究室への配属人数がほぼ均等になるように調整し、指導時間や研究スペースが過度に不足しないよう配慮している。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生命機能学科教室会議議事録 ・環境応用化学科基礎応用化学実験、応用化学実験 IAB、IIAB テキスト、応用化学基礎・応用化学セミナーシラバス ・植物医科学基礎実験 I・II、植物医科学応用実験 I・II、植物医科学専門実験 I・II のテキスト 	
1.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>【確認体制および方法】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・成績評価の方法および基準は、期末試験や小テストなどの各要素の配分も含めてシラバスに明記され、学生へ周知されている。これらをもとに、授業の内容に応じて適切な単位認定が行われている。 ・成績評価結果については、学生からの異議申し立てが可能であり、そのシステムも確立されている。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生命科学部履修の手引き ・授業科目シラバス 	
②厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組み概要を記入。</p> <p>講義科目については概ね各教員に任せられているが、成績評価方針を学生の個人情報の問題を含めて検討している。生命機能学科では、全教員が担当する研究・実験・演習・科学英語科目については、予め学生に公表した基準に沿って学習態度や達成度等を点数化し、教室会議できめ細かく検討した上で成績評価を行っている。環境応用化学科では、1年次の導入教育科目および1～3年次の実験科目において厳格な採点基準を設けて採点を行い、最終的に成績判定会議で詳細に検討し成績評価を行っている。また、各教員が行う授業報告においても、各科目の採点基準の確認を行っている。応用植物科学科では、特に実験・実習科目、植物医科学インターンシップの成績評価について全教員が参加する教員会議で協議・確認し、適正に評価している。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業科目シラバス ・各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録 	
③学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
<p>※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生命科学部ではすべての学科の就職状況を集約し、全体像を学部パンフレットに記載している。 ・生命機能学科では、就職担当教員が学生の卒業後の進路について適宜調査し、教室会議における報告を通して、進学状況および就職状況は、全専任教員に共有されている。 ・環境応用化学科では、学生の卒業後の進路についてゼミ単位で、就職担当教員が適宜調査し、教室会議で報告しており、就職状況および進学状況は全専任教員が把握している。 ・応用植物科学科では、3年生は夏休み前に研究室に配属され、担当教員はゼミ学生の就職内定や進学情報をリアルタイムで把握している。この情報は進路担当教員に報告し、集約された進路情報は卒業までの間に毎月学科全教員に伝達する 	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

システムをとっている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 <ul style="list-style-type: none"> ・生命科学部パンフレット ・各学科教室会議（教員会議）議事録 ・各学科進路調査 	
1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい <input checked="" type="checkbox"/> いいえ
※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。 <ul style="list-style-type: none"> ・生命科学部では各学科から進級状況の報告を受け、教授会で承認している。 ・生命機能学科では、実験・演習・科学英語の成績について、全教員が参加する教室会議において、成績分布に配慮しつつ協議した上で判定している。また、学期末と年度末には、特に修得単位が少なく進級が危ぶまれる学生や、成績の低下した学生を抽出して個別に指導している。 ・環境応用化学科では、実験科目の成績分布について検証し、全教員による成績判定を行っている。また、教室会議で行われている授業報告を通して、各科目の成績分布および学生の理解度について全教員が情報を共有している。さらに年度末の教室会議において、全教員により提供された情報をもとに進級・卒業の判定を行っている。 ・応用植物科学科では、実践的教育の要である実験科目について、全教員による成績判定を行っているほか、樹木医補、自然再生士補の認定養成機関であることから、資格取得に必要な科目の履修状況を常時把握・指導している。進級や卒業については、提供される情報を基に、教室会議で検討し個別指導している。 	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 <ul style="list-style-type: none"> ・生命科学部教授会議事録 ・各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録 	
②分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> B
※取り組みの概要を記入。 生命機能学科では、研究室配属授業の成績評価、発表会の成績を全教員が採点・集計している。環境応用化学科では、3年次の「応用化学セミナー」および4年次の「卒業研究」において、研究報告やディスカッションを定期的に行うことで、学習成果の進展をチェックしている。また、卒業研究発表会では、全教員が発表を聴講し、成績判定を行っている。応用植物科学科では、卒業研究発表会において、全教員による発表内容・態度の採点を行い、相互に採点内容を確認することで、学習成果評価を適切に行っている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 <ul style="list-style-type: none"> ・教室会議議事録 	
③具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> B
※取り組みの概要を記入（取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用等）。 生命機能学科では、1～2年次の実験・演習・科学英語については統一テストを行い、各学生の達成度を測っている。2～4年次に各研究室で取り組む課題研究では、その集大成となる「卒業論文」について、全専任教員が全ての口頭発表を審査・採点して、判定会議において採点結果をもとに評価を決定している。環境応用化学科では、授業科目の到達目標に関して、学期末定期試験において評価を行う。学期末定期試験が実施されない科目に関しては、授業時間内に課題を課し、回答結果を元に毎回評価を行うなどの方法により、学生の学習成果の測定を行っている。さらに、集中講義科目においては、授業時間内や授業終了後の一定期間にレポートを課すなどして適宜評価を行うことによって達成度評価を適切に行っている。応用植物科学科では、GPA や TOEIC の年次比較のほか、実験・実習科目におけるレポート内容の確認・比較を行っている。また毎年、技術士一次試験合格者、樹木医補・自然再生士補の資格取得状況、学生による学会発表などを確認している。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 <ul style="list-style-type: none"> ・学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録 ・生命機能学科卒業論文発表要旨集、統一テスト ・環境応用化学科卒業論文発表要旨集 ・応用植物科学科卒業論文発表要旨集、技術士第一次試験合格者数、樹木医補、自然再生士補登録者数 	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

④学習成果を可視化していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組みの概要を記入。取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等。</p> <ul style="list-style-type: none"> 生命機能学科では、1～2年次に実験・演習・科学英語に関する統一テストを行い、定量性をもつ達成度として可視化している。また、学生による学会発表を推奨し、学会発表数を教育成果の一つとしており、2015年度より制定された理系学部学生国内学会発表補助を積極的に利用している。 環境応用化学科では、実験科目のレポート、演習、実習それぞれの点数や成績分布について、詳細なデータをまとめて成績判定会議で報告し議論している。また、各教員の授業報告においては、各科目の成績分布を報告し、議論を行っている。また、卒業研究発表においては、「卒業論文要旨集」をとりまとめている。さらに、公的資格取得者などを表彰する生命科学部奨励賞の取り組みを通じて、資格取得者数の年次変化を確認している。 応用植物科学科では、年度ごとに技術士一次試験合格者数、樹木医補・自然再生士補登録者数を把握して、年次変動を確認している。また毎年度末には、教室会議において、学生の単位取得状況に関するデータを基に、学生指導に関する検討を行い、その方針に則った指導に全教員が取り組んでいる。 <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録 	
1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。	
①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善に向けた取り組みを行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 生命機能学科では、入学時のプレースメントテストとTOEICの成績を、1、2年次の基礎実験・演習・科学英語科目で実施する統一小テストおよび期末テストの結果と比較・分析し、教育効果について議論・検証している。また、3年次の実験・演習・科学英語科目について学生にアンケートを行い、教育内容・方針の改善に資する情報の収集を行っている。 環境応用化学科では、ほぼ毎週開かれる教室会議で教育内容、実施の問題点や教育成果について継続的に検証している。さらに、兼任講師懇談会を年1回開催し、兼任講師の担当講義科目についても教育成果について検証し、教育内容・方針の改善に資する情報の収集を行っている。2018年度は学修成果を検討した結果、卒業研究での取り組みをより充実したものにするために、3年次から4年次への進級要件の見直しが必要であるとの結論に至り、教室会議で見直し案の議論を開始した。 応用植物科学科では、授業改善アンケート以外に学科独自のアンケート調査を実施し、教員会議で結果を分析している。また、毎月2回程度開催される教員会議の中で、試験の成績や資格取得者数など教育成果に関する情報を共有化し検証しているほか、学業不振学生について原因の分析、保護者面談の実施を含めた対策を定期的に議論している。 <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録 生命機能学科アンケート調査 環境応用化学科化学系教員懇談会議事録 応用植物科学科アンケート調査 	
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※利用方法を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業改善アンケートの自由記述欄の詳細情報開示請求により、学部執行部が学部の全ての教養科目と専門科目について、授業の実施状況を確認している。 生命機能学科では、学科独自の授業アンケートを実施し、集計結果を授業の検証と改善に役立てている。また、全学の授業改善アンケートの結果についても活用するよう各教員に確認している。 環境応用化学科では、春秋学期の全学授業改善アンケートの集計結果を解析し、授業に対する興味、理解度等を知るための手がかりとしている。さらに、毎年4月に独自に1年生に対し、新入生アンケートを実施している。新入生アンケートについては、アンケート項目の見直しなどアンケートの更なる有効利用について議論している。 応用植物科学科では、教員が学期の終わりや次の学期の初めの間に授業改善の目安として用いているとともに、学生の意見を取り入れて授業の改善に役立てている。 <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録
- ・生命機能学科アンケート調査
- ・環境応用化学科アンケート調査
- ・応用植物科学科アンケート調査

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
2018年度に純増で生命科学部所属の物理担当の教養の専任教員が着任した。また、化学担当の教養教員は、2018年度以前は任期付きであったものが2019年4月以降に専任となった。さらに、2018年度には、教養教育と専門教育の連携を強めるために教養・専門教育連携委員会を発足した。生命科学部にふさわしい教養教育を編成する体制が整っている。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
各学科で重視している教養科目の中に受講率低いものがみられる。教養科目と専門科目のカリキュラムについて、教養教員・専門教育の教員ともに相互理解が十分でないところがあり、教養教育と専門教育の接続がスムーズに行われていない部分があった。	

【この基準の大学評価】

①教育課程・教育内容に関すること (1.1)

生命科学部では、学生の自立性を涵養するため、1年次から実験・演習科目を導入しているほか、学びの意欲を上げるための様々な工夫をするとともに、教育課程の編成・実施方針に基づき各学科において設定される履修コースにより、カリキュラムの順次性・体系的に配慮されている。2018年度に教養の物理担当の専任教員が着任し、2019年度には化学担当者が専任となり、教養・専門教育連携委員会も2018年度に発足して、幅広い教養が身につくよう配慮するとともに、一層の幅広い初年次教育の充実が期待される。専門教育に関しては、研究室に所属することの教育的効果は大きく、学科におけるばらつきはあるが、早い段階での受け入れは研究意欲を高める優れた取り組みである。国際性を育む様々な努力は大いに評価でき、英語による専門科目の設置は実現すれば大きな効果が期待される。理系キャリア教育を実施するために、執行部とキャリアセンターが連携したり、様々なキャリア関連科目を開講するなど、キャリア教育の提供も適切に行われている。

②教育方法に関すること (1.2)

生命科学部では各学科で入学時のガイダンス等において、理系教養科目など幅広い科目の履修を指導したり、チューター制を活用してきめ細かい履修指導を実施している。オフィスアワーはすでに法政大学全体で実施されており、生命科学部でも学生の個別指導に有効に活用されている。成績不振者に対しては教室会議等で情報を共有して、学生問題担当の教員を中心にしてケアしている。学生の学習時間の確保に関しては、テストの実施、授業支援システムの活用等により、予習・復習を行わせる工夫が行われている。また、卒業研究発表の工夫やオンデマンド型講義体制の構築に向けた取り組み、問題解決型実習の実施など、効果的な授業形態の導入にも取り組まれている。1授業あたりの学生数については、学部の特性として各学科とも実験・実習は教育の根幹としており、10名以下のグループでの実施を実現していることは、高く評価できる。

③学習成果・教育改善に関すること (1.3～1.5)

生命科学部の成績評価の方法と基準はシラバスに明記され、学生に周知されており、評価に対する学生からの異議申し立てのシステムも確立しており、適切である。厳格な成績評価実施の方策に関して、実験科目等の評価は各学科の教員の全体会議等で決定されているが、講義科目等も含めて成績評価方針の検討が進められており、検討の結果が待たれるところである。学習成果の測定としては、各学科とも卒業研究が最大の指標であり、特に発表会は全教員が聴講し成績判定を行っている。学習成果の評価・把握に関しては、各学科において統一テストや定期試験、レポート、GPA、資格試験の状況等により確認されている。環境応用化学科では卒業論文要旨集を取りまとめて学習成果の可視化としている。学習成果の検証とその結果をもとにした改善に向けた取り組みとしては、学科ごとに、プレースメントテスト等の各種テスト、独自

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

のアンケート調査等の結果を分析し、教員会議や教室会議等での情報共有・検証が行われている。

2 教員・教員組織

【2019年5月時点の点検・評価】

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

①学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。

S A B

【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。

- ・全学の「FD推進センター」で実施される授業改善アンケートに加え、各学科独自に授業アンケートを実施。
- ・2011年度より授業公開を実施。法政大学の全教職員に対して公開しており、教員が相互参観を行うとともに、教務助手・特任教育技術員・教育技術嘱託など技術系職員が参観。
- ・FDアンケート等の結果を各教員にフィードバックし、授業の質の改善に活用するシステムを整備。
- ・シラバスチェックシステムを各学科で整備。

【2018年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。

- ・授業公開：2018年度は、春学期（6月4日～6月30日）と秋学期（10月25日～11月24日（11/1～11/3を除く））に授業公開・参観を行った。春学期は公開94科目・参観24科目、秋学期は公開90科目・参観26科目であった。
- ・シラバスチェック：年度末にかけて、学部で開講されている全専門科目について、生命機能学科では学科主任と教務担当の2名が、環境応用化学科と応用植物科学科では教員全員がシラバスチェックを実施した。

【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・専任・兼任を問わず、基本的に全ての授業科目に対して授業公開を行っている。2018年度の新たな取り組みとして、秋の授業公開の開催時期を1週間ずらした。これにより、同じ授業科目でも例年とは異なる授業回の授業参観を行えるようにした。授業公開科目は春94、秋90科目と昨年度とほぼ同数が維持された。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・各学科授業アンケート
- ・2017年度授業相互参観実施報告書
- ・執行部会議、教授会資料
- ・各学科教室会議（教員会議）議事録

②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。

S A B

※取り組みの概要を記入。

生命科学部では、研究活動や社会連携・社会貢献に関する現状の活動が継続発展できるよう、ノウハウの共有や伝承を行える枠組みを構築するための取り組みを開始した。その取り組みの一環として、2018年度は小金井3学部による研究交流セミナーを開催した。2019年度開催予定の2回の研究交流セミナーと法政科学技術フォーラムの開催に向けて準備している。

生命機能学科では、FB（生命機能学科）セミナーを2017年度から開催し、研究講演と懇談会を実施して最先端の研究を共有し、研究活動の活性化を図っている。

環境応用化学科では、2017年度に続き「エコプロ2018」に出展し、学科の研究活動を広く一般に公開する取り組みを継続している。

応用植物科学科では、2年生必修科目のインターンシップによる社会体験、また学科内に開設している植物医科学センターの活動（植物病虫害診断事業）に参加させることで社会との接点を認識させ外部機関との連携の重要性が理解できる枠組みを整備している。

【2018年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

2018年度は小金井3学部による研究交流セミナーを開催した。2019年度に向けて、2回の研究交流セミナーと法政科学技術フォーラムの開催に向けて準備している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・研究集報
- ・研究交流会の資料
- ・FB（生命機能学科）セミナー案内
- ・環境応用化学科エコプロ2018出展資料
- ・応用植物科学科教員会議議事録

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
2018年度大学評価結果総評において、「社会連携・社会貢献については、外部組織との共同研究や展示会への出展など、大変活発な活動がなされており、この点も評価できる。」とされている。新たな取り組みとして、2019年度の2回の研究交流セミナーと法政科学技術フォーラムの開催に向けて準備をしている。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
2018年度大学評価結果総評において、「社会連携・社会貢献の評価所見および2018年度の重点目標にも記載があるとおり、教員個人あるいは研究室単位での取り組みが多かったように見受けられる。属人的、局所的でなく、学部組織として継続発展が可能な体制になるよう、ノウハウの共有や伝承を行う取り組みに期待したい。」とされている。この問題点を解決するための取り組みの一環として、2019年度は法政科学技術フォーラムの開催を計画している。また、2018年度に開催した研究交流セミナーの開催回数も2019年度は2回に増やす予定である。	

【この基準の大学評価】

生命科学部では、2018年度の春学期と秋学期にほぼ一ヶ月にわたって全教員の全科目を大学の全教職員に対して公開している。これは授業改善のFD活動としては大変優れた取り組みである。授業改善アンケートの利用やシラバスチェックも適切に行われている。
また、2018年度に行われた小金井地区3学部の研究交流セミナーをさらに2019年度には2回の開催が予定されており、法政科学技術フォーラムの開催計画とともに、研究活動の活性化の努力が継続されることが期待される。

III 2018年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	理念・目的	
1	中期目標	生命科学部では、自然科学の知識を基盤として多様な生命科学を学ぶことができることを、在学生および受験生と保護者などに対して周知する。	
	年度目標	学部パンフレットなどの印刷体と生命科学部および3学科のホームページに掲載されている理念・目的を、ホームページに一体化して、わかりやすい形に改編する。	
	達成指標	掲載ページの訪問回数、および新入生アンケートにおける回答内容。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	B
		理由	法政大学の入試情報サイトに、内容を新たにした学部パンフレットが閲覧できるように配置した。また、学部ホームページの閲覧数は38,413から42,127へと前年比109.7%に増加した。
		改善策	予定されている法政大学公式ホームページのリニューアルに合わせ、学部パンフレット掲載されている理念・目的などの内容を盛り込めるよう検討していく。
質保証委員会による点検・評価			
所見	本学の理念・目的の周知には、大学関連ホームページの活用が有効であると考えられる。今後の大学ホームページのリニューアルに合わせて、わかりやすいホームページの作成が必要である。		
改善のための提言	新入生アンケート等でパンフレット、ホームページに関する意見を集約し、法政大学公式ホームページのリニューアルに反映させていただきたい。また、グローバル化を見据えて、英語版の理念・目的の充実を検討していただきたい。		
No	評価基準	内部質保証	
2	中期目標	自己点検作業における執行部会議と質保証委員会の役割をより明確に分けた現在の体制を維持し、厳格なPDCAサイクルを行う。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	年度目標	前年度と同じく、4回の質保証委員会を開催し、活発な議論を行う。	
	達成指標	委員会議事録で開催回数、および議論の内容の記録。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	自己点検評価シート、年度末状況報告書を精査して執行部にフィードバックし、厳格なチェック機能を果たした。
		改善策	—
		質保証委員会による点検・評価	
所見		質保証委員会による年度末状況報告書等に対する点検・評価を厳格に実施しており、評価できる。	
改善のための提言	—		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
3	中期目標	学部開講科目における教養科目と専門科目の連携を強化すると同時に、ディプロマ・ポリシーと各科目の関連性を明確にする。	
	年度目標	教養科目から専門科目への連続性が強化されるよう、学部所属の教養担当教員と専門科目担当教員の懇談を行う。新しい形のカリキュラムマップ、カリキュラムツリーを作成してホームページなどに掲載する。	
	達成指標	懇談会の開催記録。履修の手引など。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	生命科学部に所属する教養担当教員と専門科目担当教員が意見交換をする場として、教養・専門教育連携委員会を新たに設置し、今年度は第1回委員会を開催した。教養科目と専門科目で似た内容の科目の洗い出し、教養科目における生命科学部生向けの動機づけなど、教養・専門の間の連続性をより強化するための方策が検討された。また、カリキュラム・マップとカリキュラムツリーの両方を更新してホームページに掲載した。
		改善策	—
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	教養・専門教育連携委員会が新たに設置され、意見交換がなされており、教養・専門の間の連続性をより強化している。また、カリキュラム・マップとカリキュラムツリーの両方を更新・掲載しているため、高く評価できる。
	改善のための提言	教養・専門教育連携委員会を継続的に開催し、教養科目と専門科目の連続性の強化をはかっていただきたい。	
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】	
4	中期目標	100分授業の特性を活かしたアクティブ・ラーニングの実施を促進する。	
	年度目標	教員へのアンケートにより、アクティブ・ラーニング実施授業の数を調査する。	
	達成指標	アクティブ・ラーニングの実施状況についてのアンケート結果。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	専任教員に対してアクティブ・ラーニング実施授業数を調査した結果、各教員あたりの実施数は3科目近くあり、多くの授業で実施されていることがわかった。また、今年度から新たに実施した科目数は8科目であったが、これは100分授業とは関係なく、昨年度以前から実施されている科目が多いためではないかと推測された。調査によってアクティブ・ラーニング実施の実態が把握できた。
		改善策	実施授業数の調査を兼任講師にまで広げて行う必要がある。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	専任教員に対して、アクティブ・ラーニングの調査がなされ、実態が把握され、実績が上がっている。また、その調査を兼任講師にも広げる方針が確認されており、高く評価できる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		改善のための提言	授業時間の有効活用や授業の質の向上につながる工夫などの調査が必要と思われる。	
No	評価基準		教育課程・学習成果【学習成果に関すること】	
5	中期目標		学習の総合的な結果である研究成果を対外的に発表することを促進する。	
	年度目標		学会、研究会、交流セミナーなどの学外発表の機会において、学部生が発表した記録を調査する。	
	達成指標		学外発表の回数。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価		S
		理由		学会における学生の発表は、そのほとんどが大学院生によるが、学部生の学外発表数を調査したところ、3学科合わせて36回にも達し、研究成果の対外的発表が活発に行われたことがわかった。
		改善策		—
質保証委員会による点検・評価				
所見			学部生の学外発表の調査が実施され、3学科合計36回の発表実績が明らかになり、高く評価できる。	
改善のための提言		学部学生の学外発表を促進するために、学外発表奨励金などの予算拡充を検討することが望ましい。		
No	評価基準		学生の受け入れ	
6	中期目標		広報イベントを通じた受入方針の周知について、効率のよい方法を確認する。	
	年度目標		受け入れ方針の周知にもっとも効果的な広報イベントを明らかにするため、新入生に対して、生命科学部での広報イベントに参加したかをアンケート調査する。	
	達成指標		アンケートの分析とその検証結果。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価		S
		理由		在校生すべてに対するアンケートを実施し、学部による広報活動のうち、入学前に参加したイベント、進路決定の決め手となったものなどを調査した。その結果、入学者が比較的によく参加したイベントや、進路の最終決定におけるホームページの重要性などが明らかになり、効率のよい広報活動の確立にとって重要な知見が得られた。
		改善策		今年度は初回であるために、全学年に対して調査を行ったが、来年度からは新入生に対してのみ実施し、継続する必要がある。
質保証委員会による点検・評価				
所見			アンケート調査により、入学前イベントやホームページが進路の最終決定に大きく作用していることが明らかされている。学生受け入れの効果的な広報活動の方針が明らかになっており、高く評価できる。	
改善のための提言		今後もこのアンケート調査を継続し、広報イベントの改善に対する効果を検証していただきたい。さらに、広報イベントの改善や統廃合を進めていただきたい。		
No	評価基準		教員・教員組織	
7	中期目標		教養教員の採用および教養科目の担当教員の再編を含め、生命科学部にふさわしい教養教育を行う体制を整える。	
	年度目標		環境応用化学科では、化学を担当する教養教員を採用する。	
	達成指標		教員採用記録。教養科目の担当者変更記録。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価		S
理由		教養教育担当教員と理工学部教員も参加する生命科学部委員会で公募と選考を行い、教養教育（化学）担当の専任教授1名の採用を生命科学部教授会にて決定した。高校化学に関する著作をもつなど、初年次教育を含めた教養科目の担当にふさわしい実績をもつ教員を採用することにより、化学分野の教養教育の充実が期待できる。また、この採用により、英語、数		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		学、物理、化学、科学実験、スポーツ健康科学の科目が生命科学部の専任教員によって担われることになり、バランスのとれた教養教育が期待できる。
	改善策	—
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	教養教育（化学）担当の専任教授1名の採用が生命科学部教授会にて決定されており、当分野の教育の充実が期待できる。既採用専任教員を含めて評価すると、バランスのとれた教養教育が期待でき、高く評価できる。
	改善のための提言	教養科目と専門科目の連続性の強化、教養科目間の調整および初年次教育の在り方について検討していただきたい。
No	評価基準	教員・教員組織
8	中期目標	在外研究を推進する。
	年度目標	研究室配属学生を抱え、実験・研究を指導する必要がある教員でも在外研究員制度が利用しやすくなるような方策を、将来構想委員会において検討する。
	達成指標	将来構想委員会の議事録。在外研究の実施人数。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	B
	理由	将来構想委員会で、在外研究員制度が利用しやすくなるような方策を検討することはできなかったが、2019年度に2名の教員が在外研修制度を利用することになった。
	改善策	在外研究中の研究室の人的サポートなど、制度のより柔軟な運用が可能になるような方策を将来構想委員会で検討することに加え、研究担当理事への要望などについても検討していく。
	質保証委員会による点検・評価	
所見	2019年度に2名の教員が本制度を利用する見通しである。しかし、専門担当教員が本制度を利用できていないのには、根本的な原因があり、学部内での議論では限界があると思われる。	
改善のための提言	在外研究員制度に関して、専門担当教員の運用が可能になるように法人に働きかけ等をしていただきたい。	
No	評価基準	学生支援
9	中期目標	留学生に対する修学支援制度を確立する。
	年度目標	教員の指導により、2年生以上の成績優秀な留学生と、主に留学生を対象とするチューターとの懇談会を行う。
	達成指標	懇談会の開催記録。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	B
	理由	留学生・チューターとの懇談会は開催できなかったが、2018年4月27日（金）の国際交流歓迎会に学部長が参加し、留学生との懇親を深めた。学業・学生生活の充実にむけて激励したうえで、困った際には教員や職員に相談するよう案内した。
	改善策	夏休み前後に、留学生・チューターとの懇談会を開催するよう、次期執行部に申し送る。
	質保証委員会による点検・評価	
所見	留学生・チューターとの懇談会が開催されなかったことは残念である。グローバル化のためにも留学生に対する施策は必要であり、留学生に対する修学支援の拡充を期待したい。	
改善のための提言	グローバル化のためにも留学生への修学支援は重要課題である。チューターとの懇談会だけでなく、新入留学生への修学支援を主とした施策の検討が必要である。また、チューターとの懇談会の開催が望まれる。	
No	評価基準	社会連携・社会貢献
10	中期目標	学外へ向けて研究・教育活動の紹介を促進する。
	年度目標	公開セミナー、市民講座、見本市、展示会、外部参加者のいる研修会、学園祭などにおける研究室公開などにおける紹介活動をアンケート調査する。
	達成指標	アンケート調査の結果、紹介活動の例数。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

年度末 報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	外部参加者のいるセミナー、展示会、学祭における研究室紹介の回数は 39 回にも及び、教育・研究活動の紹介が活発に行われた。
	改善策	—
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	外部からも参加できるセミナー、展示会、研究室紹介などが活発に行われているので、高く評価できる。
	改善のための提言	大学の社会貢献は重要課題であり、研究室公開などに対する費用補助の拡充などを要望していただきたい。
<p>【重点目標】 社会連携・社会貢献 生命科学部の多くの研究室では、これまでも様々な機会に学外へ向けて研究・教育活動を紹介してきたが、それらは個々の研究室、学科ごとに行われていた。それらの活動を学部が調査して、研究室間、学科間で情報を共有することにより、効果的で効率のよい紹介の仕方を明らかにし、それらを実施することで紹介活動の促進をはかる。</p>		
<p>【年度目標達成状況総括】 教育課程・学習成果 学生の受け入れ 一部の目標は達成できなかったものの、概ね良好な達成度であったと総括できる。とりわけ、教養・専門教育連携委員会の設置と広報活動に関するアンケートの実施は今年度が初めての試みであり、極めて重要な情報が得られた。今後、これらの活動を継続することが、将来の学部運営に有益であると確信できる。</p>		

【2018 年度目標の達成状況に関する大学評価】

<p>教養科目から専門科目への連続性の強化を図るという目標については、教養・専門教育連携委員会が新たに設置され、具体的な強化の方策の検討が開始されたことは大いに評価できる。また教養教育（化学）担当の教員を生命科学部の専任教員として採用できたことは、学部として今後の教養教育の充実に大いに貢献するものと期待される。</p> <p>学生の受け入れに重要な広報活動に関するアンケート調査が実施され、得られた有益な情報の活用が期待される。</p> <p>専門担当教員の在外研究制度の利用の促進が進んでいない点は早急な改善が望まれる。</p>
--

IV 2019 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	理念・目的
1	中期目標	生命科学部では、自然科学の知識を基盤として多様な生命科学を学ぶことができることを、在学生および受験生と保護者などに対して周知する。
	年度目標	法政大学の入試情報サイトに、昨年度に内容を新たにした学部パンフレットが閲覧できるように配置している。本年度は、法政大学公式ホームページのリニューアルに合わせ、学部パンフレットに掲載されている理念・目的などの内容を盛り込むよう検討する。
	達成指標	掲載ページの訪問回数、および新入生アンケートにおける回答内容。
No	評価基準	内部質保証
2	中期目標	自己点検作業における執行部会議と質保証委員会の役割をより明確に分けた現在の体制を維持し、厳格な PDCA サイクルを行う。
	年度目標	前年度の年度末状況報告書を反映して改善(A)した年度計画(P)を立て、自己点検評価シートを作成する。年度中は、質保証委員会において、執行部の年度計画の執行(D)状況を確認する。年度末には、質保証委員会の評価(C)を反映させた年度末状況報告書を精査して執行部にフィードバックし次年度に引き継ぐ。これにより、厳格な PDCA サイクルを行う。
	達成指標	委員会議事録、開催回数、および議論の内容の記録。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
3	中期目標	学部開講科目における教養科目と専門科目の連携を強化すると同時に、ディプロマ・ポリシーと各科目の関連性を明確にする。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	年度目標	生命科学部に所属する教養担当教員と専門科目担当教員が意見交換をする場として、昨年度設置された教養・専門教育連携委員会を継続する。教養科目と専門科目で似た内容の科目の洗い出し、教養科目における生命科学部生向けの動機づけなど、教養・専門の間の連続性をより強化するための方策を継続して検討する。
	達成指標	委員会の開催記録。履修の手引など。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
	中期目標	100分授業の特性を活かしたアクティブ・ラーニングの実施を促進する。
4	年度目標	生命科学部に所属する専任教員は、各教員あたりの3科目近くアクティブ・ラーニング授業数を実施していることが明らかになっている。 今年度は、アクティブ・ラーニング実施授業数の調査を兼任講師にまで広げる。また、100分授業の特性とアクティブ・ラーニング実施状況との関係を調査する。
	達成指標	シラバスの活用。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
	中期目標	学習の総合的な結果である研究成果を対外的に発表することを促進する。
5	年度目標	生命科学部では、学部生の学会発表が多くなされており、研究成果の対外的発表が活発に行われている。今年度以降も、この状況を持続させることに注力する。
	達成指標	学外発表の回数。
No	評価基準	学生の受け入れ
	中期目標	広報イベントを通じた受入方針の周知について、効率のよい方法を確立する。
6	年度目標	前年度に実施した学部在校生すべてに対するアンケートにより、入学者が比較的によく参加したイベントや、進路の最終決定におけるホームページの重要性などが明らかとなった。これを踏まえ、重点的に行うべきイベントの絞り込みとホームページの充実に取り組む。 なお、本年度は新入生に対して上記アンケートを実施し、継続する。
	達成指標	アンケートの分析とその検証結果。
No	評価基準	教員・教員組織
	中期目標	①教養教員の採用および教養科目の担当教員の再編を含め、生命科学部にふさわしい教養教育を行う体制を整える。
7	年度目標	教養教育担当の教員の採用により、英語、数学、物理、化学、科学実験、スポーツ健康科学の科目が生命科学部の専任教員によって担われることになり、バランスのとれた教養教育体制が整った。 今後は、学部専門科目との連携を考慮した、教養科目担当者変更を検討する。
	達成指標	教養科目の担当者変更記録。
No	評価基準	教員・教員組織
	中期目標	②在外研究を推進する。
8	年度目標	在外研究中の研究室の人的サポートなど、制度のより柔軟な運用が可能になるような方策を関連する委員会で検討することに加え、研究担当理事への要望などについても検討していく。
	達成指標	委員会の議事録。
No	評価基準	学生支援
	中期目標	留学生に対する修学支援制度を確立する。
9	年度目標	留学生との懇談会を開催し、留学生に対して必要な就学支援に関する調査を行う。
	達成指標	懇談会の開催記録。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
	中期目標	学外へ向けて研究・教育活動の紹介を促進する。
10	年度目標	外部参加者のいるセミナー、展示会、学祭における研究室紹介を活発に行う。従来からの取り組みに加えて、法政科学技術フォーラムへの参加も行う。 また、ホームページによる研究・教育活動の紹介の促進にも着手する。
	達成指標	アンケート調査の結果、紹介活動の例数。
【重点目標】		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

「学生の受け入れ」、「社会連携・社会貢献」

学部在校生すべてに対するアンケートにより、進路の最終決定においてホームページが重要な役割を果たしていることが明らかとなったため、ホームページの充実に取り組む。また、この取り組みは、学外に向けての研究・教育活動の紹介を促進することにもつながる。

【2019年度中期・年度目標に関する大学評価】

広報活動に対する在校生へのアンケートの結果、進路の最終決定に際してホームページが重要な役割を果たしていることが明らかになり、年度目標としてホームページの充実を挙げているのは今更の感はぬぐえないが、実現が必達の目標であろう。当然学外に向けての生命科学部の研究・教育活動の紹介に資することは明らかであろう。

【法令要件及びその他基礎的要件等の遵守状況】

特になし

【大学評価総評】

生命科学部においては教育課程・学習成果と教員・教員組織の評価項目に関する限り、いずれも昨年度に引き続いて良好な運営がなされており、残りの年度へ向けての継続的な努力が期待される。

また今回評価項目から外れた他のすべての項目に関しても一層の改善・向上の努力が望まれる。

生命科学部（guide book 2020）は大学院との連携を強調しているが、大学院への進学率は2017年度に比べて2018年度はかなり減少している。生命機能学科は34.6%から21%へ、環境応用化学科は44.9%から28%へ、応用植物科学科29.4%から16%へと、3学科とも減少しており、大学院との関係について更なる検討が望まれる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。